

発表タイトル	慶安本『とうだいき』に見る古浄瑠璃正本の形態の変遷
発表者所属名	日本文学研究専攻(国文学研究資料館)
発表者氏名	林 真人
発表内容	
<p>出版史上、寛永期(1624～45)は整版本による商業出版の勃興した時期であり、書肆たちは様々な試行錯誤を重ねて「売るための本」を作っていた。寛永二年(1625)『たかだち』以降、急速に普及していった古浄瑠璃・説経正本もまた、その形態も急速に変化させていった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 横本から縦型中本・半紙本へ 2. 十二行本から十三行本、十四行本へ 3. 太夫名の強調 4. 丹緑挿絵から墨印挿絵へ 5. 絵巻の体裁を意識した挿絵から片面・見開きの挿絵へ 6. 一枚紙の表紙から反故紙等を使った厚い表紙へ <p>これらは、「浄瑠璃屋」、「草子屋」を名乗る刊行書肆が浄瑠璃の太夫との提携関係の中で、より多くの利益を上げるために創出した工夫といえる。より経済的且つ体裁のよい本に仕立てるとともに、特定の太夫の名を記すことによって、芝居の人気にあやかっただけである。一方でまた、浄瑠璃の刊行書肆は正本の本文制作に直接関与した。正本の本文は必ずしも浄瑠璃の太夫が舞台上で語ったものではなく、様々なジャンルの文芸の本の集積場である草子屋において、舞曲・軍記・御伽草子などから材を借りて生みだされたものであった。さらに、後続の正本が先行の正本から本文を書承的に借り受けて、省略本を作る事例も見られた。</p> <p>古浄瑠璃正本『とうだいき』の寛永十年(1633)刊本と慶安三年(1649)刊本を比較すると、正本の形態の変遷を典型的に見ることができる。慶安本は本文も挿絵も寛永本に依拠してはいるが、正本の所在の示し方、表紙の体裁、行数、挿絵の形態、いずれも寛永期正本のそれらからの脱却が図られている。それと同時に、本文の省略や用字の変更によって丁数は減らされ、大幅なコストカットも行われている。</p> <p>省略によって慶安本の本文が寛永本に比して淡泊なものになっていることは否めない。しかし、当期において同様の方法で作られた古浄瑠璃や説経の本と比較したとき、慶安本の本文の接続の巧みさは目を引く。例えば、明暦本『せつきやうさんせう太夫』に見られたような、省略によって生じた物語上の齟齬が、慶安本には見られない。それだけでなく、慶安本がわずかに増補した本文を見ると、寛永本の本文のままでは慶安期の太夫の正本としてそぐわないものであることがわかる。すなわち慶安本の増補は、当期の太夫の正本であることを強調するための工夫なのである。また、挿絵においても慶安本は寛永本よりもインパクトのあるものを創出、あるいは取捨選択している。</p> <p>慶安本は、古浄瑠璃・説経正本がその形態を整えていく流れの中であって、本としての魅力とコストとのバランス調整が比較的成功的な例であると言える。そして、そこから見えてくるのは、太夫の語りを直接反映させる意図はないにもかかわらず、当代の太夫の正本であることを読者に強く意識させようという書肆の戦略なのである。</p>	